

シンポジウム1

「医療現場での補完医療の現状」

2. 兵庫医科大学皮膚科における漢方治療の現状

夏秋 優 (兵庫医科大学皮膚科)

演者は兵庫医科大学病院で皮膚科の診療を行っている。大学病院としての性格上、皮膚病の中でも悪性腫瘍や慢性・難治性の疾患が集まりやすい。悪性腫瘍の場合は手術療法が基本となるが、アトピー性皮膚炎や尋常性乾癬などのような慢性炎症性疾患では、西洋医学的に完治させる治療法はなく、日常生活での苦痛を少なくするように皮疹をコントロールすることが治療の主眼となる。また、これらの疾患に対してすぐれた治療効果を有する薬剤もあるものの、基本的には一時的な症状の抑制であり、むしろ副作用が問題となる場合も少なくない。そこで、補完医療として漢方療法のニーズが高まるのは当然であろう。しかし残念ながら、漢方医学の考え方は哲学的で、西洋医学を学んだ者にとってはその理論が難解であり、EBMとしての評価が低いこともあって難治性皮膚疾患に対する漢方治療が医師の間で広く浸透しているとは言い難い。一方、これまでの多くの治療経験により、漢方薬が西洋薬と同等、もしくはそれを上回る治療効果を発揮する例があることも報告されつつある。また、種々の臨床実験、基礎実験の結果から、漢方薬の明白な薬効が示されたり、その作用機序の一部が解明されている場合もあり、漢方治療は単なる経験則に基づく医療ではなく、証拠に基づく医療として認められる時代になったと言える。

このシンポジウムでは、皮膚疾患に対する漢方治療について、その臨床効果の客観的評価や作用機序の解明に向けてのアプローチの実例を示すと共に、保険医療や薬剤採用上の不都合など、大学病院で漢方治療を行う上での問題点についても言及する予定である。